比翼の鳥(前編)

比翼の鳥(前編)

とつ

https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=14798582

DQ11, カミュベロ, カミュ, ベロニカ, カミュベロwebオンリー, ドラゴンクエスト11, オレの連れがなにか?

カミュベロwebオンリー、開催おめでとうございます㊗️🔵🔴㊗️
主催者様、このような素晴らしい企画、ありがとうございます✨✨

カミュベロと、グゴゴゴゴ…な魔物のお話です笑

残念ながら全て書ききれず、前編だけとなりましたが、後編も出来るだけ早く仕上げます。

Table of Contents

比翼の鳥(前編)

終末論、なんていう言葉がある。

世界はなんらかの形で終末を迎え、その終末にこそ人類の行きつく先がある、と信じる人々が唱える話である。所謂、"審判の日"というやつだ。

このロトゼタシアにも似たような思想があり、それに様々な尾鰭がついて"邪神信仰"などという怪しげな信仰宗教が現れたのだが、これは邪神が世界を滅ぼし、滅びの先に人々が救われると謳うものである。

件の邪神が現れた時も、世界には災厄であるその邪神を信仰した人々が確かに存在し、実際に勇者たちも旅をする中でそれを目にしたことも幾度かあった。

あの黒い太陽がロトゼタシアの空を穿っていたあの頃、邪神教の信徒は一際目立つ声を上げていたのだが、実際勇者たちにニズゼルファが撃ち倒されて、その殆どは霧散してしまった。

しかし、世界にはそれでもまだ、「邪神がいずれ世界が滅ぼす」と訴え続ける者もいる。

ーーーーー

「この世界に終末を！邪神による破滅と救済を！」

照りつける日差しの中、暑さを物ともせず訴え続ける声に、往来の

人々が立ち止まることはない。どちらかというと、関わりたくない、と眉を顰めて通り過ぎる者が殆どだ。

それでも、このクソ暑い中、汗を流しながらも演説を続ける姿は、信仰の対象はともかくとして、その熱心さは本物であり、信心深いのは間違いない。

「…まったく、よくやるぜ」

店頭のテント下でじっとりと額を伝う汗を拭い、無神論者のカミュはそんな光景を見て、感心するようにポツリと呟いた。

雪国生まれ。暑いのは苦手だ。

砂漠の王国サマディーの暑さはカミュにとっては残酷なくらい相変わらずである。
今思えば、旅の最中でも、この国には邪神崇拝を行っていた者が多かったイメージだ。

勇者の星が近くにあった分、もしかしたら邪神に対する独自の研究も行われていたのかもしれない。あの勇者の星とニズゼルファの関係を少しでも知っていたとするなら、大したものである。

「相変わらず、あの考えだけは理解出来ないわ。なんで世界が滅んでそこに救済があるのよ。どんな風になったって生きているからこそ、嬉しいことも悲しいこともあるんじゃない」

横でサマディー特性の冷製サボテンジュースをストローで啜ったベロニカが、不機嫌そうに呟いた。全くもって、彼女らしい意見である。

「そうだな、おまえとは絶対に相容れない考え方だろうな」
「当たり前よ！あんなに苦労して倒して勇者は世界を救ったのに勝手なこと言うんですもの。頭に来るわ」

そもそもラムダの聖女としてセニカを信仰してきた彼女からすれば邪神崇拝など到底理解できるはずもなく。

そうでなくてもベロニカは困難にこそ立ち向かうタイプである。終末が幸せなどではなく、辛くても一生懸命に毎日を生きることこそが、幸せへの第一歩だと考えるような女子だ。

カミュは基本的に無神論者ではあるが、仮にも勇者の相棒として邪神を打ち倒した1人である。
流石に邪神を崇拝する気は毛頭無いし、あの連中の考えを理解する気も無いのだが。

「確かにな。まあけど、色んな考えを知っておくことは良いじゃねえか。知識が増えるのは悪いことじゃねえんだろ？アイツらの言ってるのとを知っておいて損はねえかもな」
「それは…まあ、そうだけど」

直情的な彼女であるが、本当はそれ以上に思慮深い。

そんな彼女の性格はよく分かっているつもりなので、いけすかないものに興味を向ける方法も心得ている。

「でも、そんなに急いで知りたい内容でも無いわ。そんなことより、あたしには調べないといけないことがたくさんあるの。邪神教についてなんて、後回しよ」
「ま、確かに急ぐことなんかじゃないしな」

そう言って、カミュは軽く首を左右に倒してコキコキと鳴らす。

「さて、まあソイツは置いておいて、それ飲み終わったら行こうぜ、おチビちゃん。次は…このバクラバ砂漠の西にある洞窟だったよな？」
「そうよ。昔サマディーの魔法使いが研究の根城にしてたってサマ

ディーの王立図書館にあった書物で読んだわ。怪しいところは徹底的に調べなきゃ！あと、おチビじゃない！」

やれやれ、当分暑いのは我慢しなければならないようだ。

お約束のやり取りに口を尖らせながらも意気込むベロニカ。それもそうだ。

これは彼女が元の大人の姿を取り戻すための調査なのだ。

ーーカミュは今、彼女が元の姿を取り戻すための旅に同行している。

あの世界を救う旅の後、マヤを連れて世界を周り、彼女をメダル女学院に入学させた後。

やることがなくなり、胸にぽっかりと穴が空いてしまっていた頃。

「あ、いたいた！カミュ、すぐに準備しなさい」

クレイモランに建てた家の扉が、バタンと勢いよく開かれたと思えば、そこには旅していた頃と変わらないあの小さな赤いシルエット。

ふくふくとした子供の頬と、その背に似合わぬ長い杖、意志の強い菫色の瞳。

「ーーーベロニカ？」
「ベロニカ？じゃないわよ。何惚けた顔してんのよ。相変わらずひよっこちゃんね。ほら、さっさと準備して」
「おまえ、なんでクレイモランにーーって言うか、準備っていきな

りなんのことだよ。どこに行くってんだ？」

以前、イレブンと姉妹二人が勇者の剣を命の大樹に奉納する旅に出たと風の噂で聞いていた。

そのまま二人はラムダの里に戻ったというが、今度はどこに行こうというのだろうか。

ズカズカと遠慮なく家に踏み込んできて、急かすように杖で叩いてくる。

「もちろん、あたしの身体を元に戻す旅よ！マヤちゃんもいなくて、アンタどうせ暇なんでしょ？だったら丁度良いじゃない。ほら、早く早く！」

嵐のようにやってきた彼女。自信たっぷりの勝気な表情も、またあの頃のまま。

こうして半ば強引にベロニカの旅に駆り出されたカミュであるが、彼女の言う通り特段やることもなく、よくよく考えれば順当な人事でもある。

イレブンやロウは、イシのムラ、そしてユグノアの復興に力を注いでおり、マルティナやグレイグは言うまでもなく、デルカダールの王族や宿将として多忙を極めているだろう。

シルビアは久しぶりに父親との時間を設けた後、再び世を笑顔にする旅へと出ているという。

もちろんセーニャと旅に出ることも考えたようだが、勇者と剣を奉納する旅から帰ったばかりだし、姉妹そろって三度旅に出てしまうと父母にも寂しい思いをさせると思い、今回は妹を置いて旅に出ることにしたという。

そこで彼女が思い付いたのが、自分という訳だ。筋は通っている。

「アンタの"インパス"くらいは、少しはあてにさせて貰うわよ？ひよっこちゃん」
「相変わらず頼み方が可愛くねえな、おチビちゃん」

懐かしい掛け合いからこうして始まった旅は、順風満帆、と言うわけではなかった。

あの世界を救う旅でも立ち寄ることのなかった怪しげな遺跡や危険な洞窟。

色々な国で話で聞いたことや、本で読んだことを頼りに、様々な場所を訪れ、チャレンジして、失敗や無駄足を重ねていた。

その都度喧嘩したり、徒労に終われば二人して気落ちしたり、それをいつものように軽妙なやりとりで励ましたり。

そんなことが続いているにも関わらず、カミュには旅をしていた頃のように毎日が新鮮であった。

その掛け合いこそ以前と同様だが、二人での旅はスリルに溢れ、それでいて心がどこか休まる旅であった。邪神を討伐しなければならない旅とは違い、世界に滅亡が迫っていない分、時間制限のない、気ままに続けられる旅だからかもしれない。

「ふうん…また雰囲気のある洞窟だな」

二人が辿り着いた砂漠の洞窟は、入口も朽ちかけた小さなものだった。

「文献によると、500年ほど前にサマディーの魔法使い達がここを寝

ぐらにして研究を行っていたみたい」
「500年…か。もう何も残ってないかもしれないな」
「まあね」

頷くベロニカだが、それほど悲観的な表情ではない。
何の成果も得られないことなど、この旅ではもはや日常茶飯事だからだ。

ベロニカが元の姿を取り戻すこととは全く関係ない収穫があったりすることもままあり、それはそれで、彼女にとって興味深いものだったりするのだ。横道に逸れることも少なくない。

「そいつらはわざわざ洞窟に篭って、何の研究してたんだろうな？」

人一人が通れるくらい狭く暗い道をランプで照らし、蔦などを短剣で斬り払い、ニョロっと顔を出す蛇なんかを摘み出しながら、カミュが前を歩く。

「サマディーの人達は元々星の番人と呼ばれた…あの勇者の星が近かったこともあるから、やっぱり昔の勇者に関する魔法の研究をしていたんじゃないかしら？」
「まあそう考えるよな。けど、それならわざわざ人目につかないようにして洞窟に篭ったりするか？」
「魔法の研究は危ないことも多いのよ。失敗したら周りにとんでもない大きな影響を与えるてしまうこともあるもの。昔は今ほど魔法の研究も進んでいなかったでしょうし、それくらい用心していたのかもしれない」

ベロニカの話に、そういうもんか、と一応カミュは納得したのだが、やはりどこか引っかかる。

仮にそんな危ない魔法を研究していたとするなら、それと勇者の星、それらがどのように結びつくのかが分からなかった。

「お、ここじゃねえか？」

しばらく進み、開けた場所に出ると、机や椅子、棚など研究に使われていたと思う痕跡が風化せずに残っていた。

「間違いないわ」

眼の前の光景に喜色を浮かべたベロニカは、とたとたとカミュを走り抜き、早速部屋内の物色を始める。ベロニカにとっては宝の山に見えたであろう。

「思ったより色々残っているのね」
「砂漠は乾燥してるから、カビとかにやられずに済んだのかもな」

と言っても、しっかりと保存されていた訳ではない。埃や砂による消耗もひどく、残された本の類いも読めるか、どうか。

ここから自分の仕事ではないので、何か気になる物ーー路銀の足しになるようなお宝でもないかと遺構内をカミュは歩いて回る。

先立つものはなんとやら、長く旅を続けるにはやはりお金も必要であり、その点、元盗賊のカミュは宝に鼻が効く。

ベロニカは自身の為の研究を。
カミュはその間のサポートを。

彼女が一度のめり込むと数日間は動かないなんてことはザラで、カミュはその間にこうやって価値の高そうなものを探したり、別ルートでベロニカと同じものを探ってみたり、飯を準備して戻ってきたりする。

それも出来るだけ、彼女が手を止めずとも食事が出来るものを用意してくる。

「美味しい！もうちょっと辛くてもイイけど…やるじゃない、カミュ！」

没頭しているベロニカも、カミュの持ってくる料理には素直な感想と笑顔を見せる。

そうやってカミュは、自分が出来ることでベロニカの旅を支えてきた。

しかし今回は残念ながら一通り歩いてみてもお宝と言えるような代物はなく、先程サマディー食事を取ったばかりでまだ腹も減っておらず、時間を持て余したカミュは、なんとなく傍にある形の残っていた本を手に取り、パラパラと軽く巡ってみる。

紙は相当痛んでいるし、破れている。が、残された字は所々は読むことが出来る。
とはいえ、どうせ読めたところで内容はまるで分からないのだが。

やはり、自分にこういう作業は向いていない。

パタン、と本を閉じてみると。

「ん？」

手にしていた本の表紙に記載された題材が眼に入った。

「…進化……？秘法……？」

埃を払い、文字を読み起こす。
一昔前の字体の為、全てが読めた訳ではないのだが、辛うじてこの二つの単語だけはカミュにも読むことが出来た。

「おい、ベロニカ。なんか面白そうなもんがあったぞ」

既に数冊の本を同時に器用に眼を通し、読み始めているベロニカだったが、カミュに呼びかけられた為、ヒョイと顔を覗かせる。

「進化の秘法について」

ベロニカは旧字体を難なく読み上げる。
古代文字の読解はユグノアの賢王ロウにさすがに一歩譲るものの、多少昔の程度の文字であれば朝飯前なのだ。

「ふーん、なかなか興味深いタイトルね。アンタにしては面白そうな本、見つけたじゃない」
「まあな。それで？何が書いてあるか読めるか？」

促され、ベロニカは本を開き、眼を通してみる。

「…ダメね。読めるところが断片的過ぎるわ」
「そうか。まあこんだけボロボロなんだ。仕方ねえか」

ベロニカでも痛んだ本からではその内容まで読み解くことは出来なかった。

ただ、ベロニカはどちらかというと前向きに捉えている。

「けど、これを調べてみるのは悪くないかもしれないわ」
「ん？本の内容が分からないのに調べるのか？」

どうやるんだ、というカミュに対して、ベロニカは得意げな表情だった。

「言ったでしょ？断片的だって。内容は理解できないけど、いくつかの単語は理解できるのよ。それを組み合わせていけば、もしかし

たらこの本に書かれていた内容に近付けるヒントを見つけることが出来るかもしれない」

そう言ってベロニカは再び本を1ページ目からめくり、分かる単語を羽根ペンで革用紙に書き連ねていく。

進化の秘法
禁断
帝王
神殿
封印
邪神
勇者
故郷

「…うーん、目ぼしいのはこんなところかしら。後は傷んでて読めないわね」
「なるほどな。けど、この中だけでもいくつかオレ達にも関わりがある単語がある」

例えば、邪神。

一つは自分たちが旅の末撃ち破ったかの邪神。

そして勇者の故郷といえば、思い当たるのがユグノアだ。

勇者イレブンの故郷でもあり、先代勇者ローシュの子孫達が代々治めた国。今はイレブンが復興に尽力する国でもある。

思わぬところで出てきた。

あの旅で関わった、勇者と邪神の重なり合う歴史。

それが単語だけとはいえこのようなところにも出てくる。この本、そして"進化の秘法"と示されるものが、これらに無関係だとは思えなかった。

「禁断って書いてあるくらいだし、もしかしたらこの進化の秘法って、かなり危険な魔法なのかもしれないわ」
「他にもぞっとしねえワードがいくつかあるな。おまえの言っていたように、人里離れてこんな辺鄙な場所で研究してたのも頷けるな。邪神なんて単語が出るなら尚更だ」

これは、思いもしない掘り出しものかもしれない。
しかし、これを調べることはベロニカの言う通り大きな危険が伴う可能性がある。

「…アイツのところ、行くか」
「そうね。忙しいところ悪いけど…」

二人の頭に、純朴、だけど意志の強さが宿った彼の笑顔が思い浮かぶ。

勇者イレブン。この魔法が勇者が関わっているかもしれないとなると、彼無しではことを運べない。

それに。

「…これをちゃんと調べるには、勇者だけじゃなくて邪神のことも調べる必要があるんじゃねえか？」

アイツら、というのが誰を指しているのかすぐに分かったベロニカは、あからさまに嫌そうな顔をする。先程の邪神信仰の団体のことだ。

とはいえ、カミュの言う通り、この魔法のことを調べるには、"こち

ら側"の知識だけでは足りない気もする。

「どうする？正面から玄関でも叩いてみるか？」
「大体、お邪魔します、って言って素直に迎え入れてくれるのかしら。あたし達、仮にも世界を救った勇者一行って、顔が割れてるのよ？」
「顔隠して邪神教に興味があるって言えば、今ならすんなり通してくれるんじゃねえか？今のご時世、そんな特異な奴、そうはいないだろうし」
「うわぁサイテー…嘘でもそんな嘘は付きたくないわ。それに…神の民でも分からないことだらけの邪神なのに、普通の新興宗教ぐらいの人達がどこまで本当に邪神を知ってると思う？」

神の民の里に、邪神との戦いの姿が記された壁画があったが、実際に邪神はどこから、何のためにやってきたのかまでは記されていなかった。

太古に直接邪神と関わったとされる彼らですら分からないことが多いのだ。
それを、慕うとはいえごく普通の人々が紡いできた話など、信憑性があるかは疑問であった。

「まあ…それは確かに。けど、邪神のことを深く知ることは別に本来の目的じゃないんだ。直接邪神に関係なくても、それに関わることは何か分かるもしれないだろ？」

ベロニカはあくまでイヤイヤという様子だが、兎に角、潜入さえしてしまえば後はこちらのものである。必要な情報を掻っ攫って、
とっととおさらばすれば良い。この辺りは流石に元盗賊というところか。

それに、別にベロニカが来る必要は無いのだ。
こういうことは、自分がやればいい。そう思っている。彼女には手

にした情報だけを与えれば良いのだ。

二人がその文献を手にして洞窟を出た後、まずはユグノアに飛ぼうとしたその時。

砂漠の向こうから何かが砂煙を立てて近づいてくる。

「…何かしら」
「あれは馬だな」

身構えるベロニカだったが、乗り手が誰だか分かり、すぐに杖を下ろす。

「ベロニカさま！カミュさま！」
「どうしたんです？こんなところまで…」

顔を砂埃だらけにしてやって来たのは、若いサマディーの騎士であった。サマディーにいる間に世話になっており、もう何度も見た顔だ。

「お手紙です！先程早馬で届きました。急ぎユグノアへと向かって下さい」
「ユグノアへ？手紙はイレブンからね」

騎士から手紙を受け取ってみると、案の定差出人は、勇者イレブンである。

「マジか。タイミングが良いのか悪いのか…」
「カミュ、手紙読んでみなさいよ」

便箋の封を切り、手紙を取り出して眼で追ってみる。

「……会って話がしたい。ユグノアで待ってる、だと」
「それだけ？随分情熱的なラブレターね」

「ラブレターなら、気持ちが抑えられなくなって手紙出したパターンだな、これは。…まあ余程急ぎの用事ってことか」
「丁度いいじゃない。向こうの話を聞きに行くついでに、この本の話をイレブンにもしてみましょ」

手紙を届けてくれた兵士に礼を述べて、カミュはキメラの翼を取り出した。

「進化の秘法っていうくらいだから、おまえの身体も"進化"させられるかと思ったんだけどな。こんな危険そうな魔法じゃ、そうはいかないか？」
「進化っていうのはちょっと違う気がするけど…」

進化ではなく、自分には"成長"が必要なのだが、空振りの多いこの旅の中で、彼が旅の本来の目的である"姿を取り戻す"ということをちゃんと考えてくれていたことに、ベロニカは少しくすぐったい気持ちになる。

「あ」
「なに？どうしたの？」

ぽん、と手を打って思い出したようなカミュを、ベロニカが怪訝な顔で覗き込む。

「"成長"だけじゃなくて、そう言えばここら辺りは"進化"が必要かもしれないぜ？」

悪戯っぽく親指で胸部を示す旅の相棒に、容赦なく炎の魔法が撃ち込まれた。

ーーーーー

往来は以前より、活気に満ちていた。

かつてウルノーガの奸計により、魔物に滅ぼされたユグノア王国は今、イレブンやロウの陣頭指揮の下、着実に復興を遂げつつある。

まだ街と呼べるようなものではないが、少しずつ家が立ち、路が舗装されるなどしてきている。

イレブンはイシの村で育った為か、国の象徴たる城を築くことにあまり拘りがないようで、ユグノアは国というより、大きな街として栄えていくことになりそうだ。

なんとも、欲のないイレブンらしい国である。

「やあ、二人ともよく来てくれたね！」

そんなユグノアにやってきた久しぶりの仲間二人を、イレブンはとびきりの笑顔で二人を出迎えた。

余程嬉しかったのだろう。顔は土埃だらけで、つい先程まで作業をしていただろう姿である。

「随分復興が進んできているみたいね、イレブン。さすがはあたし達の勇者さまね」
「そんなことないよ。僕一人じゃ何もできなかったよ。お爺ちゃんの伝手が無くちゃこうやって人も集まらなかったし、設計も何も出来ない。ボクは力仕事くらいしか出来ないんだ」
「いや、こうやって人の先頭に立って国を元通りにするなんて事、誰にでも出来ることじゃねえよ。実際大した奴だよ、おまえは」

イレブンの言うように、確かに元ユグノアの王族であるという伝手は大きいのだろうが、それでも皆が笑顔で作業をしていけるのは、イレブンの人柄によるものである。

二人に褒められて、恥ずかしそうでもあり、嬉しそうでもある。

それは勇者の為せる技というより、彼の純朴で人好きされる性格が、人を寄せ付け、現場に良い空気を生んでいるに違いない。

「二人が一緒にいてくれて助かったよ。旅は順調かい？」

ベロニカは、イレブンに元の姿を取り戻す、そしてその旅に"カミュを召使いとして連れて行く"と記した手紙を送ってきていたようで、イレブンは二人が一緒にいることを知っていた。

召使いとは酷いなと苦笑いしながらも、それがベロニカが無理矢理な理由をつけて、自分を納得させて、彼を連れ出した精一杯の表現であったことは、イレブンにとっても想像に難くない。

「聞いてよイレブン！カミュったら、この前変な魔物に魅力されちゃって、三日間もそのままだったのよ？ぼけっーとしちゃって！ホント情けないったらありゃしないわ！」
「おいおい、それをいうならおチビちゃんがズンズン怖いもの知らずで進んだせいで、遺跡の罠にハマって三日間出れなかったこともあったろ？ったく、"考えナシ"ってのは怖いよなあ」
「なんですって？！考えナシはアンタのことでしょ？！」

久しぶりに、二人の掛け合いを見るイレブン。

(懐かしいなぁ…相変わらずだなぁ)

あの頃を思い出し、終始にこやかに、ぎゃーぎゃー言い合う二人が息切れするまで見守る。

「そういえばイレブン、貰った手紙のことだけど、いったい何があったの？」

暫く近況報告など一通り話に花を咲かせた後、ベロニカが本題へと

話を移した。

「こんな手紙でわざわざ呼び出すくらいだろ？そんな急ぎだったのか？」
「あ、うん。それなんだけど…実際見てもらうのが一番早いかな」

そう言ってイレブンが立ち上がり、二人も顔を見合わせた。

地下へと案内された二人の目の前に現れたのは、古く、厳かで大きな建物だった。

「これは…神殿？」

今の世にはない独特の建造物。何かを象ったような像も見える。
その造形を見るに、何かを祀っていたかのような神殿のようである。

「発掘はまだ全部じゃないんだ。多分もっと奥に続いているみたいなんだけど、相当大きな神殿みたいで、奥まで発掘するにはまだ時間がかかりそう」
「そうみたいだな。大分古い遺跡みたいだが」

そう言ってカミュが像の跡へと近付き、確認のために触れようとしたその時。

「触ってはなりません！」

突然背後から知らない声がして、カミュの手を止める。

「お気をつけ下さい、カミュさま。貴重な歴史的建造物です。傷つけでもすれば、それだけで史跡の価値が落ちてしまいます」

やってきたのは学者風だが、品の良い若い男。

「あ、ああ。悪かったな」

勝手に触ろうとしたのは事実なのでカミュも素直に謝るが、像の前に立って、熱心にそちらを気にかけるその姿。ゆったりとした言葉遣いといい、若いのに随分しっかりした学者だなと思う。

多分、カミュとしては苦手なタイプである。

「ごめんねエース。ボクが言わなかったからいけないんだ」
「いえいえ、宝集めに手慣れたカミュさまでも、それだけ珍しさを感じるものであったということ。ですが…今後は気になったからといって、直ぐに触って確かめようとするのは、やめた方が宜しいと思いますよ？カミュさま、御身のためにも」

そう言ってイレブンにエースと呼ばれた学者風の男は、カミュににっこり笑いかけた。

歳は同じくらいだろうか。身長は勇者やカミュよりも高く、すらっとしている。

少し細めでエメラルド色の瞳は、彼の柔らかい人なりの印象を与え、髪は聖賢の姉妹同様、短くも金糸のような髪。煌びやかな学者の衣装からは高貴さすら漂う。

要は、抜群に良い男であった。

そんな良い男から笑顔を向けられると、どうもバツが悪く、むず痒い。悪いことをしたのはこちらなのだ。

「そうよカミュ。不用意に触ったりして、壊したり、呪いにでもかかったらどうするのよ」

ベロニカもまた、これに関しては腰に手を当ててお冠である。

「ちっ、悪かったって。すまなかったな、えーっと…エースさんだっけか」

そう謝るも、エースと呼ばれた男の眼は、今はカミュへと向いていなかった。

代わりに彼の視線は、隣でぷりぷりと頬を膨らますベロニカに向いている。

「…もしかして、貴女は…ベロニカさまでいらっしゃいますか？」
「え？ええ、あたしがベロニカだけど」

ああ、とエースは嘆息すると、突然名前を呼ばれ戸惑う彼女の小さな手を、膝まづいて両手できゅっと握った。

「ちょ、ちょっと…」
「光栄ですベロニカさま。勇者と共に邪神を打ち倒したと言われる聖賢の姉妹のお一人とこのようなところで出会えるとは！」

感動のあまりか、手を握る男の声が震えており、ベロニカは瞳をパチクリさせた。

「エースはもともとサマディーで古代魔法の研究をしている学者でね。まだボク達より少し上なくらいの歳だけど、とっても優秀なんだ。よく、キミやセーニャに会ってみたいって言ってたんだ」
「ええ、私のような魔法を志している者にとっては、勇者さまは元より、ベロニカさまとセーニャさまは憧れの存在です。是非とも、お近づきになりたく…」
「え、ええ。是非宜しくお願いします、エースさん」

余りの興奮具合に若干引き気味のベロニカではあるが、それでも憧れの存在だと聞いて悪い気はしないのだろう。小さな手でちゃんと

握手を返した。

「早速ですがベロニカさまにお伺いしたいことが…」

それからというもの、カールはあのゆったりした口調からは考えられないような、怒涛の魔法トークを繰り出す。

当初はその圧倒的な熱に押されっぱなしであったベロニカだが、お披露目だけあるカールの知識は確かなようで、その見識の深さに次第に相槌を打つようになり、意見を述べるようになる。

「あなた、随分勉強してるのね。こっちも教えてもらえることがありそう。サマディーの学者さんとはもう色々お話したと思ったけど…他にも、あなたみたいに優秀で若い人もまだいたのね」
「光栄です、ベロニカさま。まだ貴方の足下にも及びませぬが…。例えばサマディーに伝わる勇者と魔法の話がありまして…」

二人は見つかった謎の大いなる神殿を前に、全く違う魔法の話で多いに盛り上がってしまっている。

で、その間イレブンとカミュは蚊帳の外、しばらく立ちぼうけとなってしまった。

「…まぁアイツはとりあえずいいわ。で、イレブン。そろそろこの神殿について話してくれないか？」

ガシガシと頭後ろを掻いて、カミュは取り敢えず置いておき、本題に入ろうとする。

「え？ベロニカはいいの？」
「ああなったら梃子でも動かせねえよ。とりあえず行こうぜ」

そう言ってそそくさ先に行くカミュを、イレブンは慌てて追いかける。

「…で、こいつはどういう遺跡なのか分かってるのか？」
「まだなんとも。けどエースの見立てでは、500年くらい前のものじゃないかって」
「500年だと？」

カミュは、先般ベロニカと二人で訪れた遺跡をまず思い出した。
偶然だろうが、あの遺跡も500年ほど前のものであった。

カミュは再び先程触りそうになった像に目を向ける。

「神殿っていうくらいだから何かを祀ってたんだろ？それにしても、なんとも不気味な像が多いな」
「うん、それは同感。何か魔物を象ってるだろうけど…どう見ても友好的な魔物じゃないよね、コレ」

イレブンも銅像の前に立って顔を軽く顰めた。

頭には複数のツノ、尖った口にはビッシリと牙が並び、蝙蝠のような羽。

悪魔と形容するのがよいだろう。それもベビーサタンのような可愛げがあるものではない。

「ジイさんはなんで言ってるんだ？」
「お爺ちゃんも、ユグノアにこんな遺跡があるなんて今まで聞いたことがなかったって。今はエースと入れ替わりに用事でサマディーに行ってるけど…色々調べてみるって」

賢王と呼ばれ、実際にユグノアを統治したロウすら知らないとなると、いよいよ謎に満ちてくる。

直感でしかないが、この神殿は世間から疎まれていたものではなかったのではないかと感じる。

地下に、隠されたように造られた神殿。

人知れず、ひっそりと埋まっていたことからも、あえて人目に触れて記録を残したくなかったと捉えることも出来る。

ふと、灼熱のサマディーで熱心に布教を行っていた男の顔が思い浮かぶ。

「世界に滅亡を！邪神による救済を！」

誰も見向きもしない中、ただ狂信的にまでに。

(邪神教…か)

あの旅で確かに打ち倒した、邪神ニズゼルファ。

それを未だに慕う人々。そして、あの遺跡で見つけた"進化の秘法"とやらが記された書物にも邪神との記載があり、それが随分昔から存在する事を意味していた。

ユグノアの地中深く。隠されるように眠っていたこの神殿は、その頃の人々が後世の人の眼を避ける為にこのような措置を取ったとも考えられる。

ーーーもしくは、これを世に出さない為に、ユグノアが建国された、とは考え過ぎであろうか。

邪ななりの像や神殿も、それが"良くないもの"だと分からせる為に、あえてその様な形にしたとも考えられる。

「…イレブンおまえ、サマディーの学者を呼んだってことはある程度、目星付けてんだろ」

「…うん。多分、キミの考えている通りだと思う」

イレブンも気付いている。浮かない色であるが、その表情は真剣であった。

脳裏に浮かぶ、あの禍々しい気。忌まわしい空間に響き渡る、悍ましい声。

ケトスの背に乗り飛び込んだ黒い太陽で待っていたのは、これまで感じたことの無いようなとびきりの邪悪な空間と存在であった。

邪神ニズゼルファ。

あの死闘は忘れたくても忘れられるものではない。

この遺跡には、あの戦いの末に撃ち破った、邪神が関わっているのかもしれない。

だから、"星の番人"として勇者の星の研究をずっと続けていたサマディーの学者を呼び寄せたのだろう。

あの星を研究するということは、邪神ニズゼルファにも通じることにもなるはずである。

「ベロニカさま。こちらの遺跡、実に興味深いものでして…」

そうこう考えを巡らせるうちに、その呼び寄せられた本人が、ベロニカを伴って漸くこちらにやって来た。

「ちょっとアンタ達、なんであたしを置いていってるのよ」

けどまずベロニカは、遺跡よりも先に、勝手に話を進めていた二人に口をとがらせる。

ぷうと頬を膨らませたベロニカが、二人にパタパタと詰め寄った。

「魔法のお話に夢中だったろうが。それに別にまだ大した話しちゃいねえよ」
「当たり前よ。あたし抜きで話を進めようなんてそうはいかないわ。それで？どういう話をしていたのよ？」

イレブンが、簡単にカミュに話したことをベロニカにも伝え、時折エースが私見を交えて話をする。耳を傾けるベロニカの表情は真剣そのものだ。

「500年前？」
「ええ、私の見立てでは大凡それくらいかと」
「…偶然かしら？」

彼女もまた、つい先日聞いたばかりの年月を再び耳にしようとは思っていなかったらしく、確認するようにカミュの方を見た。

「やっぱり結び付けたくなるよな。けど、まだなんとも。でも、この如何にもな像を見てみろよ」

カミュの傍にやって来て像を近き、背伸びして見ようとするが。

「…ちょっとこのままじゃ見にくいわね」

像は台座から含めるとかなり大きく、ベロニカの身長ではよく見ることが出来なかった。

「抱えてやろうか？ご主人さま」
「ふん、別に大丈夫よ。これくらい」

"召使い"という立場から分かりやすく揶揄うカミュに対して、ベロニカは余計なお世話だとばかりに頬を膨らませ、首元のペンダントに手を当てた。

ぱあ、と暖かな赤い光が彼女を包み込み、光の中から妙齢の女性が姿を現す。

「ふふん、これでよく見えるわ」

ふくふくした小さな子供姿の時とは違い、大人の姿は聖賢の姉妹であるセーニャと同じ、大層な"べっぴん"の女子である。

この旅の中でも何度か眼にしているカミュでも、未だにハッとさせられる。もちろん、そんな素振りは見せもしないが。

「おいおい、今大きくなる必要あるか？」
「ふふん、訓練よ、訓練。たまには元に戻っておかないと。視線だって、小さい時と今じゃ大分変わっちゃうんだから、今から慣れておかないと」

べ、と小さく舌を出す。

相変わらず、自信に溢れた瞳、勝気な表情だが、彼女の場合はこれが最大の魅力だろう。

「おお、なんと麗しいお姿…」

それは同じ男である学者エースにおいても同じようで、ベロニカの真の姿を見た彼も驚きを隠せないようであった。

「魔力を奪われて今のお姿になられているとは伺っておりましたが、これ程とは…」

その妙齢となったベロニカが、カミュと横並びに立って、銅像と睨めっこしている。

「悪趣味な像ねぇ。センスがないわ」

「珍しく同感だ。けど…どうなんだろうな？」
「あの本と関係があるってこと？んー…まだなんとも言えないけど、同じ頃の遺跡っていうなら繋がりがないとは言い切れないわね」

二人でウンウンと首を捻っていると、

「ねえねえ、2人とも。さっきからなんの話をしてるんだい？」

今度はイレブンが蚊帳の外になってしまったので、

「悪い悪い」

と、カミュは懐から、サマディーの遺跡で見つけた文献を取り出してイレブンに渡す。

「これは…」
「あたし達もコレをアンタに見せようと思って来たのよ、イレブン」

イレブンは古い書物をめくる。
といっても、古代文字など分からないのだが、

「イレブンさま、少しお貸りしても？」

エースがイレブンから文献を受け取って、パラパラと眼を通す。

「……進化の秘法、禁断、帝王、神殿、封印、邪神、勇者、故郷……読み解けるのはこういった類の言葉ですね。これは実に興味深い」

ベロニカがあっさりと読んだ古書だが、一般人にスラスラと読めるようなものではない。

それをわずかな時間で読み解いたエースの知識は確かなもののようである。

「流石、優秀ねエースさん」
「恐縮です、ベロニカさま。まさかそのようなお褒めの言葉を頂けるとは…」
「まあね。けど、これはあたし一人で見つけた訳じゃないわ」

そう言って自慢気なベロニカの視線に映るのが先にいるカミュだと知ると、改めて感心したように頷いた。

「なるほど…カミュさまとお二人で。流石は世界をお救いになった英雄のお二人だ。しかしベロニカさま、こちらはこの書籍と遺跡に関わり合いがある、と？」
「ええ。勇者さまの故郷から想像出来るのはこのユグノアで間違いないし、神殿があったとするならこの神殿のことを指していると考えてもおかしくないわ。ーータイミングは偶然としか考えられないけど、この本に書いてある神殿はこの神殿のこと。そしてこの神殿が祀っていたのはーー」
「"邪神"ってことだね」

イレブンの言葉に、ベロニカは深く頷いた。

「まだ確証は何もないから、邪神とは言い切れないわ。けど、少なくても邪神に関係ある"何か"よ」
「その"何か"を解き明かす鍵が、残りのワードってことだな」

禁断、帝王、封印、そして、進化の秘法。

残された四つの言葉が、一体何を示しているのだろうか。

「馴染みのない言葉ばかりだけど……この中でも、"進化の秘法"は全く聞いたこともない言葉ね」
「禁断ってあるくらいだから、危険な魔法なのかもしれないね。

エース、この魔法について何か知っている？」
「…いいえイレブンさま、このような魔法は、未だ私も聞いたことがありません」

若くも優秀な学者の知恵者のエースではあるが、そんな彼をもってしても聞いたこともないという魔法。

「まあ未知の魔法など、この世界にはまだまだ多くあるでしょう。これもその一つに過ぎません」

だが、当のエースは呆気からんとしていて、顔は然程暗くはなかった。知らない、ということが特に問題である訳ではないらしい。

「結局は地道にこの遺跡を発掘して読み解くことが、この進化の秘法とやらを探る最もな近道かもしれません。そして、それこそが魔法を解き明かす醍醐味というものではありませんか？ベロニカさま」

エースは随分と柔軟な考えの持ち主のようである。分からないと早々に匙を投げるのではなく、今後どうするべきか、自分の意見も、そして魔法そのものに対する信念も持ち合わせている。

「同感よエースさん。イレブン、あたし達もこの遺跡の探索を手伝うわ」

ベロニカもまた、いつも通り真っ直ぐである。

仮にこの遺跡が自分の本来の目的を果たすものでなくても、勇者や邪神が関わることであるとするのであれば、放っては置けない。

「さすがはベロニカさま。あなたさまにお力添え頂ければ、きっとこの神殿のことも秘法の謎もすぐに明らかにすることが出来るでしょう」
「ベロニカ、ありがとう。君が手伝ってくれれば百人力だ」

「何言ってんのよイレブン。アンタが困ってるっていうのに、このベロニカさまが手を貸さない訳がないでしょ？」

自分は勇者の導き手。世界を救う旅は終わったが、自分の使命は勇者を導くこと。それは今も変わっていない。

「それにこの魔法、"進化の秘法"というくらいです。これを解き明かせば、ベロニカさまの身体ももしかしたら元の身体に戻せるやもしれません」

そう笑顔でエースが言ったこと。カミュも同じことを言ってくれていた。
後に不埒な発言が元でメラを顔面に受けるハメになったのだが、進化、と聞いてやはり行き着く考えは大抵同じなのかもしれない。

「ありがとう、エースさん。なら、まず行きたいところがあるの」
「はて？どちらでしょうか？」
「クレイモランよ。それと古代図書館」

エースでも知らなかった魔法であるが、他にもロトゼタシア大陸には魔法に精通した者は少なくない。

魔法大国のクレイモランの研究者であるエッケハルトや、シャール女王の傍には魔女リーズレットもいる。

ベロニカよりも長く魔法に携わっている二人。魔法の国であるクレイモランには、過去の叡智が詰まった古代図書館もある。

ベロニカもこの旅の中で複数回訪れているが、あれだけの膨大な本の山。数回行ったくらいで読破できるものでない。

逆に言えば、進化の秘法についても記載がある本があることは充分に考えられるのだ。

「なんとあの魔法大国クレイモラン…それに、かの有名な古代図書館にも…ああ、なんということでしょう、かの国に行ける日がやってくるとは…胸が躍ります。参りましょうベロニカさま、是非同行させて下さい」

若干興奮気味のエース。サマディーの研究者である彼は、国を離れて外に出て行くことが中々出来ない。

今回はイレブンたっての希望で、サマディー王より指名を受けて派遣されてきたのだ。研究の為なら自由な移動を許されているのだろう。

そもそも、サマディーからクレイモランは遠国であり、古代図書館に行き着くには厳しい旅路と、手強い魔物が立ち塞がる。行きたくても行けない、研究者にとっては桃源郷のような場所なのであろう。

そこに行けるというのだから、彼が歓喜するのは最もなことである。

「ええ、エースさんにも是非同行をお願いしたいわ。イレブン、問題ないかしら？」

優秀な彼が、そこでどのような発見をするのか。時に、それがもしかするとこの遺跡を解き明かすヒントになるかもしれないのだ。

「勿論。調べごとは人手は多い方が良いし、発掘の方は人手が足りてるから、現場の方は僕に任せて、そっちを三人にお願いしてもいいかな」

大方の方向性が決まった。
イレブンとエースの反応とこれからのことが決まり、大凡満足したベロニカなのだが。

「ちょっとカミュ？ボサッとしてないで。さっさとクレイモランに行くわよ？」

旅の相棒が、先程からダンマリを貫いているのが腑に落ちない。

ベロニカはカミュへと詰め寄った。

普段では見上げることになる彼の顔が、今はほぼ隣にある。

「…ん？ああ、クレイモランだな？とりあえず行ってみるか」
「なによ？ボーッとしちゃって。イレブンの国の為なのよ？シャキッとしなさい」
「別にボーッとはしてねえよ」
「してた！」
「してねえ」

こんなやりとりをしながらもベロニカは少し気になった。
心ここに在らず、だけでなく、カミュの歯切れが良くない。

(なによ…調子狂っちゃうじゃない)

返事も生返事であり、何より、先程から視線が交じわらない。

同じ身体の大きさだからこそ、すぐに眼が合う筈。前は向いているのに、なんだかこっちをちゃんと真っ直ぐ見てくれない気がした。

「カミュさま、微力ながら私もお手伝いさせて頂きます」

そんなベロニカの横に立ち、柔らかい笑みを浮かべたエースがカミュへと手を差し出す。

「…ああ、頼りにさせてもらうぜ、エースさん」

が、カミュはその手を握り返すことなく、僅かに利き手を挙げて反

応した程度であった。

「ちょっとカミュ？失礼じゃない。ちゃんと握手くらい返しなさいよ」
「うるせえな。握手なんてガラじゃねえんだよ。エースさん、まあちょっとやかましい旅になるかもしれねえが…まあ一つ、宜しく頼むぜ」

それをイレブンは黙って見ている。ちょっぴり、やれやれといった苦笑ともつかない表情で。

元盗賊と聖地の魔法使い、そしてサマディーの魔法学者。

こうして三人は、"進化の秘法"という謎の魔法を解き明かすべく、魔法大国クレイモランを目指す。

ーーーーー

光る様な銀雪。

街の中心にはクレイモランの魔法の結晶であるエターナルストーンが煌めく。平和を象徴した石碑であり、ここで恋人が愛を誓うと永遠の愛が得られるというロマンチックな話もある。

「素晴らしい国ですね、ここは」

ステンドグラスに彩られたクレイモラン城の城門前にたったエースは、改めてこの国と城の美しさにため息をついた。

「カミュさまはこの国のお産まれなのですね。なんとも羨ましい限りです」
「ああ、あんまりいい思い出なんてないんだけどな」

感動するエースとは違い、カミュからすれば生国とはいえ、親の顔さえ分からず、唯一の肉親である妹とバイキングに使役され、貧しさと寒さを耐え凌いだ日々。

対岸から見えたクレイモラン城の輝かしい灯りに、余計惨めさを感じたことを覚えている。

そして、妹を一度失った故郷。そして盗賊に身を落とした自分。

勇者の力によって妹が解放されて、贖罪を果たしたとはいえ、それは消えることのない事実。

今となっては恨みがある訳ではないが、良い思い出があるとも言えなかった。

しかし、そんなことをエースが知るわけもない。

彼にとっては、今見えるクレイモランが全てだ。

「この国は雪が強い。しかしそれに耐えようとする人々の思いが魔法の発展にも繋がった。古代図書館の存在もこの国が発展した理由だと伺いました。人と古代の叡智の結晶、そういう意味でも素晴らしい国です」
「それを女王サマが聞いたら、泣いて喜ぶと思うぜ」
「そうね。今のロトゼタシアに、魔法においてこの国の右に出る国は無いわ。伝説の氷の魔女が、女王さまの側近だもの」

かつては争った相手であるが、今は女王の側近…というよりも良き理解者として、あの魔女はクレイモランにとってなくてはならない存在となっている。

「先程、ベロニカさまが仰っておりました、魔女リーズレットのことですね。ベロニカさまが危なかったイレブンさまをお救いなさっ

た時のこととか…」
「そうよ！このベロニカさまの奮迅の大活躍、エースさんにも見せてあげたかったわ」

ふふん、と自慢げに胸を張る彼女だが、実際ベロニカがいなければイレブンは危ないところであっただろう。

何百年も生きた魔女。それに見合うだけの強敵であった。だからこそ、今回の件の魔法にしても、何か彼女なら知っているのではないかという期待もある。

「昔の自慢話はその辺にして、そろそろシャールのところ行くぞ」
「自慢話ですって？！あたしの魔法が無きゃアンタなんか雪だるまにされてたのよ！」

旅を初めて数日経ったが、もはや何度目か分からない二人のやりとりを見ていたエースだが、着眼点がまた違う。

「人を雪だるまにする魔法があるのですか？それは一体どのような魔法で…」

こうなると、ベロニカとエースの魔法談義が始まる。しかもまあまあ長い。

魔法のことなど無知もいいところのカミュには出来ない話である。

その場に座して、二人の熱が冷めるまで黙って見ているしかないのである。

(ーーー楽しそうだな)

キラキラしている、とはあのような表情のことを言うのであろう。熱を持った談義をするベロニカの表情は、あまりカミュが見たことがなく、新鮮なものだった。

知識を語り合う喜び、それを共感し、時には初めて知ることへの驚嘆。自分との旅では見ることのない新しい彼女の顔であった。

今になって思えば、初めて出会った時から、あまり魔法について深く誰かに語る彼女を見たことがない。

どちらかといえ暇な時間は自分で魔導書などを読み解き、自学に励んでいたベロニカ。天才と自称しながら、それを誰かに披露する姿など殆ど見た記憶がない。

たまにキャンプなどでロウに質問するようなこともあったが、皆の前で話をすれば、仲間の耳にも入り、其々の考えで、あれこれ意見が飛ぶ。あくまで話題の一つでしかなかったのだ。

それが、話が出来ない人間と出来る二人しかいなければ、こうも変わる。

初めてそういうタイプの人に出会えたのかもしれないし、歳が近い分、話もしやすいのかもしれない。

「すみませんカミュさま。どうもベロニカさんとはすぐ盛り上がってしまいまして…」
「いや、別に気にすんなよ。アイツも楽しそうだしな」
「ええ。私もこうやって自分の知識を互いに磨き合うことが出来る方が傍にいることが、とても嬉しい」

にこやなかエースの顔が、今の自分にはただただ眩しいものであった。

「お久しぶりですね、ベロニカさん、カミュさん。旅の方は順調で

いらっしゃいますか？」

玉座のまでのシャールとの謁見。その両脇には国の宰相となった
エッケハルトと氷の魔女リーズレットが控えている。

二人の支えと国の宝は民であるとの信条の下、益々シャールも聡明
さを増しているようだ。

「ええ、シャールさま。……と言っても、まだこの姿のままだから
順調と言っていいのかは分からないけど」

ベロニカは子供姿で両手を広げてみせた。

二人が旅をしていたか頃から、シャールには何度か謁見している。
城の図書館を借りたり、王族直轄地の調査の許可だったり、それこ
そエッケハルトやリーズレットの知恵を借りる為であったりと色々
だ。
なのでシャールをはじめ、ここにいるひとびとはベロニカが姿を取
り戻す為の旅をカミュと行っていることは知っている。

「でも、今日はいつもと違うお話みたいだけど」

話を切り出したのはリーズレットである。

「おチビちゃん、あなた意外と面食いなのね。小さい姿なのに、青
髪のボウヤといい…よくこんな顔の良いオトコばっかり引っ掛けて
来るわね？ちょっと妬けちゃうわ」

そう言ってカミュとベロニカの後ろに控えている男を見て、少し怪
しい笑みを浮かべた。相変わらず妖艶である。

「リーズレット！この人はそういうのじゃなくて……っていうか、
カミュのどこが良い男なのよ？！なによこんな頭イガイガのレディ

の扱いもできない男……第一、あたしは顔の良い男なんて、き、ら、い、なの！」
「おい、ベロニカ。オレを勝手に巻き込んで勝手に貶すな」
「あら、そうなの？なら私青髪のボーヤのこと、ちょっと童顔だけど嫌いじゃないし、どうかしら？このあと一杯」
「ほっとけ。好きでこんな顔してるんじゃねえ。けど…そうだな、悪くねえ。オレも魔女の酒ってやつを飲んでみたいと思ってたんだ」
「ちょっ……アンタ馬鹿じゃないの？！血まで氷にされたいわけ？！」
「バカってなんだよ！」
「バカだからバカって言ってるよ！このひよっこ！」

こうなると止まらない。

さっきまでかしこまって控えていた二人が、王座の中心でぎゃあぎゃあと、晴れて犬も喰わぬ喧嘩が始まってしまったので、エッケハルトが呆れて止めに入る。

「やめんか！仮にも王前であるぞ！リーズレットもこれ以上茶化すでない！」
「「……すみません」」

エッケハルトの一喝に、むんずと二人も黙り、揃って謝罪する。が、二人のやりとりを見て、ぷっ、と吹き出したのはシャールだけではない。

リーズレットも、冗談よ、と言って引き下がった。

「えーー…こほん、してベロニカ殿。そちらの御仁は？」

改めて、咳払いをしたエッケハルトが、場について行けず、少々戸惑いを見せていた彼らの後ろの男に視線を向けた。

ひっそりと二人のやりとりを楽しげに見守っていたシャールを始めとした者たちも、慌てて襟を正す。

「……お初にお目にかかります、シャールさま。私はサマディー王国にて魔法の研究を行なっております、エースと申します」
「サマディーで魔法の研究を？それはそれはエースさん、初めまして。ご丁寧な挨拶、痛み入ります」

エース自身が自己紹介を行い、シャールこれに応えた。魔法の研究者ということもあり、興味を抱いたようでもある。

「エースさんは今、イレブンに招かれてユグノアで発掘された遺跡を調べているの」
「遺跡…ですとな？それは一体…」

眼を細めたエッケハルトの質問に、ベロニカとエースが丁寧に答えていく。

「…つまり、カミュさんとベロニカさんが偶然見つけられた書物が、もしかしたらユグノアで発見された遺跡にも関わるものであるかもしれない…と？」
「ええ。まだ分からないことが多いんですが、少なくとも書物が書かれた時期と神殿が造られたのは殆ど同じ時期なんです。けど、これに書いてある"進化の秘法"っていうもがサッパリ…」
「それで魔法に詳しいアンタらにあたってみたって訳だ。何か聞いたことないか？心当たりがあることならなんでもいい」

ベロニカから手渡された書物をエッケハルトが一枚ずつ捲り、リーズレットもそれを横から覗き込んだ。

「随分、物騒な言葉が並んでいるな。しかし、私も進化の秘法という魔法は聞いたことがない」

さすが、古書をスラスラと読み解いたエッケハルトだが、進化の秘

法については知らないようであった。リーズレットも同様に首を振る。

「そうですか…」
「ただし」

少し肩を落としたベロニカを制するようにして言葉を続ける。

「進化、という魔法については覚えがある。確か…マナ…マナカナ…マナティー…？いや、マーディラス…いや違うマイナス…」

「マナスティス」

エッケハルトの代わりに、リーズレットの口からで言葉に、耳目が集まる。

「おお！それじゃ、マナスティス！古代図書館で読んだことがあるぞ！」

カミュはベロニカと視線を合わせると、ベロニカは首を横に振った。彼女と聞いたことがない魔法なのだ。

「確か…人を魔物へと進化させる禁断の術じゃった筈じゃ」
「人を…魔物に？」

エースもまた聞いたことがないようで、身を乗り出した。

「古い魔法よ。うんと昔話……名もない一介の魔法使いの男が、一国のお姫様に一目惚れしてね。勿論、どうにもならない身分の差があったんだけど、どうしても諦められない男がどうにかして王女を手に入れようとして、自分で魔物へと進化する禁術"マナスティス"を生み出したの。力を手に入れて、王女を無理矢理手に入れるために、ね」
「なにそれ…随分身勝手な理由で生まれた魔法なのね」

思わずベロニカは顔を顰めた。人の気持ちも理解せようとせず、自分勝手な理由で無理矢理相手を手籠にしようとする男など、サイテーでしかない。

「恋は盲目っていうけど、時に恐ろしいものになるってこと。マナスティスで生まれ変わった彼は想像以上に手強い魔物でね。国の軍隊が出て行って漸く討伐されたとされているわ。…それからマナスティスは根絶させられて、禁断の魔法として僅かに書物に残っている程度。ただ、この魔法を模倣しようとした奴もいたみたいだから…進化の秘法っていうのは、その類の一つかもしれないわね」

リーズレットの言っていることが本当なら、進化の秘法とは魔物に人を進化させる禁術ということになる。

存在したという確証はないのだが、それを程の魔法を根絶、もしくは封印するとなると、相当な力が必要な筈である。

「……もしかして」
「ユグノアの神殿は、進化の秘法を封印した遺跡ではないか、そう仰りたいのでは？ベロニカさま」

エースの言葉に、ぱっとベロニカの表情が明るくなった。
まさに彼女の意を得た意見であったからだ。

「なるほどね。いいところ突くじゃない、金髪のボウヤ」

感心したようにリーズレットがエースを称賛した。リーズレットも大方同じ意見であったようだ。

だが、そう断定するには材料が少ない。

「リーズレット。マナスティスの魔法のことが書いた本は古代図書館にあるのよね？」

「ええ…けど、さっき説明したこと以上のことは書いてなかったと思うわよ」
「ありがとう。けど、自分の眼で読んで確かめてみるわ。それに、進化の秘法についても書いた本もまだあるかもしれない」

もし、進化の秘法を封印している神殿だとすれば、仮に封印が解かれてしまった時のことも考えなければならない。

恐ろしい魔法だからこそ、再び封印する術なり対策を今のうちに立てなければならない。
でないと、勇者の国ユグノアが、再び災厄に見舞われることになってもおかしくないのだ。
イレブンが必死に立て直す国を、そのような目に遭わせる訳には絶対いかない。

「確かに。私もまだ図書館の本全部に眼を通した訳じゃないし…まだ何か残っているかもしれないわね」
「ええ。だからあたし達は古代図書館に行くわ」
「そういうことでしたら、我々も手伝うこととしましょう。シャールさま、宜しいでしょうか？」

エッケハルトの申し出に、シャールは快く頷いた。

「勿論です。勇者さまにはお返し出来ない程の恩がありますし、国の危機とあれば尚更力添えさせて頂きます」
「ありがとうございます、シャールさま」

ベロニカはスカートの両端を摘んで、カーテシーでお辞儀をして、カミュも軽く頭を下げ、エースは深々と礼をする。

こうして、クレイモランでの謁見は終わり、三人は城を後にした。

「さあ、これから古代図書館に篭ってマナスティスと進化の秘法について何かないか、本を読み漁るわよ！」

「お供致します、ベロニカさま。禁術を我々で解き明かしてやりましょう」

勇み足のベロニカに、学者エースが続く。

「……」

そんな二人を見て、カミュはゆっくりと足を止めた。

「カミュ？なにボーッとしてるのよ。さっさと古代図書館に……」
「…いや、オレはやめておくぜ」

ーーそこに行っても、恐らく自分に出来ることはない。だから、ここからは自分の仕事ではない。

カミュの言葉を一瞬飲み込めなかったのか、
ぱたりと足を止めたベロニカだったが、すぐに踵を返してきた。

「ちょっと、なに言ってんのよ？進化の秘法のことを調べないと、ユグノアが…」
「分かってるよ。けど、そいつはオレ向きな仕事じゃねえ。図書館には…お前たち二人だけで行ってくれ。オレはオレで調べたいことがある。それに、遺跡の発掘の方も気になるしな。一度ユグノアにさっきの報告がてら戻るつもりだ」

当たり前ではあるが、カミュはイレブンから頼まれたことを放棄するような無責任な男ではない。
ただ、本を読むような調べごとには向いていないし、その点、知識のあるエースとベロニカが行動した方が効率が良いーー少なくともそう伝えたほうが彼女は納得すると思った。

「…アンタが調べたいことって、なに？」
「サマディーだ。例の邪神教ってやつを探ってみる」

ベロニカはハッとした。イレブンからの呼び出しで有耶無耶になっていたが、あの書物を見つけた時、元々調べようと言っていたことだ。

あの時は多少の冗談でもあったが、今となっては充分当たってみる価値がある話になっている。
しかし、それは口に出来る程簡単なことではない。危険を伴う潜入任務だ。

「ダメよ。何があるかも分からないのに…アンタ一人でそんな危ない所行かせられない。あたしも行く」
「おいおい、アジトごとイオグランデで吹っ飛ばしに行くんじゃねえ。こういうのは、オレ一人だからいいんだ。おまえ達は図書館で、オレは足を使って情報収集、これが一番効率がいいだろ？」

相変わらず揶揄うような言い方だが、確かにカミュの方がそういったことに慣れているのは否めない。効率の話で言えば尚更だ。

しかし、ベロニカは納得出来ていない。

(大事な時は、ずっと一緒にやってきたじゃない)

旅の中で、確かに別行動になることは今までもあった。ベロニカが調べごとをする時、カミュが食料調達に出ていたのが良い例だ。

けど、危険が伴ったり、ここ一番の場面では、二人いつも一緒にだった。

名無しの洞窟、魔物の住処、呪われた遺跡。

攻撃は最大の防御なり。
回復を必要としない程の二人の圧倒的な火力で、どんな場所も手を携えて超えてきた。

一緒なら大抵のことは乗り越えられる。

安心して背中を預けられる。

カミュだって、そう思ってくれていると思っていた。

ーーそれに大切な時にいつも一緒だったのは。

そして姿を取り戻したら、誰よりも一番に見せつけたい人。

たっぷり自慢してやるつもりだった。

そして、一緒に喜びを分かち合いたい人だった。

なのに、得体の知れない連中の本拠に飛び込むというのに、一人で行くなど、ベロニカにはやはり納得出来ない。

「別に良いのではないでしょうか」

しかし、ベロニカがさらに詰め寄って再び異を唱える前に、エースがカミュの意見に賛同を示す。

「エースさん！」
「ベロニカさま。我々とカミュさまでは得手不得手が異なりましょう。聞いておれば私ではそのような危険な場所では確実にお役に立てませんし、かと言って私一人では古代図書館に行くことも出来ません。だとするならば、私たちとカミュさまが別行動を取ることが最も現実的でありましょう」
「ああ、その通りだぜ。ベロニカ、エースさんがこう言ってるんだ。だから…おまえは図書館の方を頼む」

ベロニカは何かを言いたそうに、口を小さく震わせた。だが、エースが賛同していて言葉が出てこないのか、最後に小さくため息だけつく。

「…じゃあな。エースさん、あとは頼んだぜ」

何を、とは言わない。

「ええ、私にお任せ下さい」

屈託のない彼の笑顔。その柔らかさや明るさは自分には無いものだ。

魔法の知識なら、ベロニカに負けず劣らずなのだ。

ーーコイツとなら上手くやれるだろうーー

カミュは荷物からキメラの翼を取り出し、ユグノアに飛ぼうとした。

「カミュ」

不意に、ベロニカの声が背中にかけられる。

「…気をつけてね」

不満と心配が入り混じった複雑な表情。
どちらかと言うと不満の方が強そうだ。

「…ああ。おまえもな、ベロニカ」

最後にそんな彼女らしい表情を脳裏に刻んで、カミュは一筋の光となり、ユグノアへ飛んだ。

ーーーーー

ーーー"力"を持った人間は、道をよく誤るという。

ーーーそれは、道を誤ったように思われる"結果"があるからだ。

ーーー中途半端な"力"では、正解は生まれない。欲しいものも手に入らない。この世界は変えられず、終わらない。

ーーー唯一、あの邪な神をも超える"力"があればーーーー

ーーーーー

「マナスティス…えらく危険な魔法があったものじゃのう」

サマディーから戻ってきていた勇者の祖父であるロウは、感心したように白く太い髭を撫でた。

「へぇ。爺さんでも知らねえことがあるんだな」
「ほっほっほ。カミュよ、ワシとてまだ知らないことばかりじゃよ」

賢王と称されたロウは、孫を見るような優しい眼でカミュに笑いかけた。

「知識とは幾つになっても増えることこそ至上の喜び。しかし…この世の全てを知るには、人の一生は短きに過ぎる。…いや、だからこそ人は、その生を燃やし、命を輝かせるのかもしれんのぉ」
「…哲学的だな。まあ、ぱふぱふやピチピチバニーなんかも、知っ

てても損はないってことだな、勇者サマ」
「カミュ！その流れでボクに話を振るのやめてよ！」

慌てるイレブンの仕草を見て、カミュはくつくつと笑う。勇者でなければ、彼は本当に人の良い純朴な青年だ。

「…さてさて、話を戻そうかの。マナスティス程強力な魔物とまではいかぬが、人が魔物に変わるということは、ワシらにとってはそんなに珍しい話ではないぞい」

勇者とその相棒は、ロウの言葉に耳を傾けた。

「…人の心には魔物が〜なんて、話じゃねえよな？」
「いやいや、もっと現実的な話じゃよ。人を魔物に変えてしまう力…それは"魔力"じゃ」

魔力。平たく言えば魔法を使う力の源のようなもので、人は皆その大小に拘らず生まれ持っているものとされる。

ただ、発揮をすることなく一生を終えることが殆どであり、その中でも魔力を自在に扱えるものが魔法使いと呼ばれる。

もちろん魔法を使えても、魔力の上限も個人差がある。

カミュとて魔法は多少は使えるものの、その魔力は眼の前の勇者やロウ、双賢の姉妹二人のものに比べれば、児戯に等しいものであるからだ。

そんな魔力というものが、ロウによると人を魔物に変える根源となるという。

「カミュよ。お主はそれに近い経験を幾度もしておる。心当たりがないかの」
「オレがか？」

カミュは少し思案する。

こんな自分の魔力が高まり、魔物へと近づく時とは。

「……あ」

勇者が何かに気付いたらようだ。ほぼ同時にカミュもまた答えを見出す。

「…なるほど、ビーストモードか」

イレブンとセーニャ、そしてカミュの三人の力が揃った時、カミュの身体能力が大幅に強化される秘技である。

「そうじゃ。カミュよ、魔力の上限には当然個人差がある。肉弾戦が主体のお主の普段の魔力は、ワシらと比べて高いとは言えまい。じゃが、お主の秘技"ビーストモード"はイレブンとセーニャが魔力をお主に分け与え、能力を大幅に強化させる技。この二人の魔力によってお主が魔力が普段の自分を超える時、超人的な力を発揮できる、という訳じゃ」
「じゃあカミュは…あの時、魔物に近い状態になってるってこと？」
「その通りじゃ。魔力の増大。それも本来自分の持つ容量を大きく超えるのじゃ。その分、大きな力も発揮できよう。じゃが…それはつまり毒にもなりえる。毒が過ぎれば、身も心も魔物に変わってしまう…ということは充分に考えられる」

ロウの推測が正しければ、人から魔物に変わってしまった者は、何らかの理由で魔力を自分の本来持てる一線を超えたということになる。

「最も、魔力が元の自分を完全に凌駕することなど、簡単なことではない。禁術マナスティスには、そのような力が関係しておるのや

もしれぬ」
「爺さん、一つ聞いていいか？」

カミュの問いかけにロウは頷いた。

「魔力が自分を超えると魔物になる可能性があるんだよな？じゃあ逆に…魔力が本来自分が持っている力から下がっちまったらどうなるんだ？」

勇者はハッとしたような表情をする。ロウもまたカミュが何を言いたいのか分かったようだ。

「うむ。推測でしかないが、超えた者が人でなくなるように、魔力の容量が本来より小さくなってしまえば…何かしら身体に影響があると考えるべきじゃろう。ベロニカのように」

かつて魔物に魔力を奪われたベロニカ。主犯であったデンダを討伐してその魔力は取り戻したものの、ベロニカはいまだに子供姿のままだ。

「もしかしてベロニカがあの時奪われたものって…」

イレブンの考えに、再びロウが頷いた。

「ベロニカは、魔力とともに"魔力の上限"をも奪われてしまったのかもしれぬ。本来、その人間が姿を維持するために必要な上限を」

その結果が、幼子の姿になるということなのか。
本人は年齢を奪われて若返ったと解釈していたが、どうもそれは違うのかもしれない。

「…あれだけガンガン魔法使うくせに、まだ足りねえのか。末恐ろしいおチビだな」
「いや、だから本当は大人なんだって」

イレブンは呆れたようにツッコミを入れた。本来はこれはベロニカ自身の役目である。

「ベロニカが預言者から受け取ったペンダント。あれは一時的にベロニカの魔力の上限を元に戻す効果があるのやもしれぬ」

全ては仮説でしかないものの、充分納得のいく話である。

もし、だ。進化の秘法が魔力の上限を増幅させ、人を魔物に変える魔法であるとするなら。

マナスティスが人を魔物に変える、というだけの魔法で、進化の秘法も同様のものであれば、ベロニカの姿を取り戻せるという線は消えたものと考えていたが、魔力の増減が結果的に魔物に変貌させるだけであって、それを元々下がってしまっているベロニカが利用すれば、本来の姿を取り戻すことが出来るのではないのだろうか。

「…まだ、アイツを元の姿に戻す選択肢として残ってるって…ことか」

ポツリと呟いたカミュの言葉を、隣でイレブンがにこやかに聞いていた。

「オイ、何笑ってんだよ」
「あ。いやゴメンね。なんだかんだ言って、ちゃんとベロニカのこと考えてるんだなって」

カミュがちゃんとベロニカのことを考えていてくれることを改めて知り、嬉しそうなイレブン。

ーーそう、ちゃんと考えている。
オレは、オレなりに。

「そりゃあ…まあ、その為に旅してた訳だからな」
「なんか歯切れが悪いね」

カミュの言い方はまるで、頼まれたから、というような言い方である。
どうしてベロニカが、旅の連れとしてカミュに声をかけたのか、まさかそこから説明しなければならないとはイレブンも思っていない。

あとは眼の前の本人次第なのではあるが。

この男は自分のこととなると、とことん臆病で不器用で、どうしようもなく面倒くさい性格であることをイレブンは長い付き合いで知っている。

「イレブンや。ワシは席を外そうかの」

二人のやりとりを見ていたロウは、一度にっこり微笑むと、ゆっくり立ち上がる。

「え？お爺ちゃんどこに行くの？」
「魔力と魔物の関係について、ワシももう少し調べてみるわい。デルカダールに行って、モーゼフとも少し語らってみるとするかのう」

ロウはデルカダールに行くようだ。旅の頃と同じように語らう孫とその親友二人を見て、久しく会うことの出来ていない二人の仲間と友人の様子を、見たくなったのかもしれない。

ロウは、優しくカミュの肩に手をかけた。

「カミュや。ベロニカのこと、頼んだぞい」

そう言って、ロウはその場を後にした。

「頼んだって言われてもな…」
「それで？」

イレブンは、無理矢理話を戻す。
この男、話を逸らすのが上手いので、イレブンは自分から早めに切り込んだ。

「まさかベロニカが大人に戻ったら、はい旅はおしまいサヨウナラ、なんて言うつもりじゃないだろうね」

視線をあからさまに横に逸らすカミュの顔を見て、イレブンは天上を仰いだ。この男、本当にそのつもりだったのか。

「別に、アイツとはこれからもちゃんと仲間として……」
「カミュ、そこから説明しなきゃいけない？わりと面倒くさいんだけど」

結構本気で怒ってると思われるイレブンを前に、カミュは両手をあげて降参の意を示した。

「…ちっ、こういう時だけ口達者になりやがって。…悪かったよ。けど、オレなりに考えてんだ。アイツが…ベロニカがもし大人に戻った時の事くらい」
「ベロニカの気持ち、今更分からないなんて言うつもりじゃないよね？」

カミュは自分のことになるととことん不器用ではあるが、鈍感ではない。むしろ人の気持ちの機微には敏感なくらいであり、元盗賊とは思えないような面倒見の良さはそうした所の現れでもある。

第一、あの"天才魔法使いのベロニカさま"が恋をしてしまうような男。
器用なくせに本当はとても不器用で、ぶっきらぼうな癖に本当は誰

よりも優しいこの男に。

ベロニカはずっと前から心惹かれている。

生まれや過去ではない。この男の一番大切なところを、ちゃんと見ている。

「なあイレブン、一つ聞いても良いか？」

カミュは、ふと相棒の方へと振り返った。

「なんだい？」
「ベロニカの好きことってなんだろうな」
「ベロニカの好きなこと？」

質問の真意が分からなかったが、イレブンはそう言われて少し考える。

「まず魔法だよね。そのうち掃除だって魔法で出来るようにしたいって言ってたし、今までベロニカの人生の中でもとっても大切なことだっただろうし」
「だよな。オレも同意見だ」

カミュもイレブンの言葉に頷いた。イレブンは尚も首を傾げる。

「…アイツは天才だよ。それに努力家だ。生まれは聖地、しかも賢者の生まれ変わりの一人。アイツと対等に魔法の話なんて出来るやつそうはいない」

それはカミュの言う通りだろう。ベロニカは才気あふれるが幼い頃から使命のために努力も惜しまなかったと聞く。実力は言うに及ばず、魔法の知識だけでもロトゼタシア大陸においても並ぶものはそういないだろう。

「対してオレは魔法なんて殆ど使えない。しかもどこで生まれたかも知れない、バイキング育ちの盗賊崩れだ。生まれも育ちも、出来ることも知ってることもーーアイツとオレじゃ何もかも違う。だから…オレじゃ元々ベロニカの気持ちに応えるなんて無理なんだ」
「カミュ、それはーー」
「アイツが魔法の話をする時、本当に楽しそうだった」

相棒が違うと言おうとする言葉を、カミュは無理矢理遮る。

「あのサマディーの学者。アイツは若くて優秀だろ。アイツと話をしている時のベロニカ…なんつーかキラキラしててさ。勝てねえな、って思ったんだ。そりゃそうだよな。自分が得意で好きなことを、同じ目線で、同じ知識で話が出来るんだ。ああいう奴が本当の意味でベロニカ。幸せに出来るんだろ思うぜ」

イレブンの言うことはもう認める。

柄にもなく、恋をした。しかも、それは自分なんかが手を出してはいけない高嶺の花。

分かっているつもりだった。けど、勇者の相棒として世界を救う中で、勝手に勘違いをしてしまった。グイグイ自分のテリトリーに入ってくるから、こっちもつい同じ態度で接してしまう。

それが心地よい、と思った時にはもう手遅れだった。

今の旅の話だって、断ろうと思えば断れたはず。

けど、断ることは出来なかった。

口には出さないが、彼女が自分を頼りにしてくれているのは嬉しかったが、なによりも一緒にいて、あの旅が終わってポッカリ空いていた心の隙間が埋まっていくのが分かった。

あの懐かしい距離感が心地良かった。

これが"人並みの幸せ"ってやつなんだろうと。

けど、ベロニカがそう感じることの出来る相手は、もっと他にもいるはずだ。

「カミュ…それ、本気で言ってるの？」
「ああ。マジだぜ」

本気で好きになってしまったから。誰よりも幸せになって欲しいから。

使命のためなら誰よりも勇ましく、まっすぐで、純粋で。

自分には、到底眩しすぎる。

イレブンの拳がブルブル震えている。いつその拳が飛んできてもおかしくない。
ここまで怒っている相棒をみたことがないが、自分も本気だからこそ、それに応える。

「イレブン、アイツが幸せになる為にオレが諦める。それだけでいいんだ。それは、そんなに間違ってるのか？」

それが、自分なりの愛の形ってやつなんだろう。

「…キミが諦めるっていうだけなら、百歩譲って間違ってないとするよ。けど、キミはもっと大切なこととちゃんと向き合ってない」
「オレが…向き合ってないだと？何と向きってない？」

カミュの声が低くなる。自分なりに、本気で向き合った答えだと思っている。

「ベロニカがカミュのこと、好きだってことだよ」

が、今更、そんなカミュの声色に怖気付くイレブンではない。

「さっきからカミュが言ってること、それは全部、キミだけの気持ちだろ？ちゃんとベロニカの気持ち、聞いたことあるのかい？彼女の本気と向かい合ったのかい？今のキミは全部自分の判断で彼女を突き放してるんだ。随分勝手なヤツさ」
「いや、だから…まあ、気持ちは確認なんてしたことねえから、そもそも自惚れなのかもしれねえけど、もしそうなら、本当にそうなる前に諦めるっつー話で…」
「それが勝手だって言ってるんだよ」

言葉とは裏腹に、イレブンの声が少しずつ穏やかになっていく。

「いいかい？確かにお互い話が合う、っていうのも大切かもしれない。でもベロニカはそれだけで判断なんかしないよ。じゃなきゃキミみたいな面倒くさい男、好きになったりするわけないじゃないか」
「面倒くせえ面倒くせえって…人のことなんだと思ってんだよ」
「本当のことじゃないか。まだまだ言わせてもらうよ。カミュ。もしキミが本当にベロニカのことを諦めて、ベロニカが本当に誰の恋人になって…いつかその人と結ばれても本当に後悔しない？」

ーーベロニカが、誰かの腕に抱かれている。

大人になった彼女が、自分も見たことのない微笑みを浮かべて。

そんな彼女を、遠くから眺めている自分がいる。

あの菫色の瞳には、もう違う誰かを映している。

彼女は自分に気付くことはない。もう振り向いてくれる事もない。

あの勝気な笑みが自分に向くことは、永遠にない。

ーーーそれでも、それが彼女の幸せなら。

「……ああ、後悔しねえよ」
「嘘だね」

個人的には熟考しているつもりだ。なのに、あまりにもあっさりと否定されて、逆に拍子抜けする。けど、否定した顔はイレブンは真剣そのものだった

「ボクは知ってるーー知ってるんだ。キミはずっと後悔する。想いを伝えておけば良かった。もっと傍に居ればよかったって。そう望んだってどうにもならないって分かっているに」
「知ってる？イレブン、おまえ何を言ってーーー」

そう言いかけたカミュの全身を、悪寒のようなものが貫き、急に脳内に見たこともない景色が、走馬灯のように走る。

黒くぼやけた視界の先。

倒れた大木に挟まれて身動きが取れないベロニカが、空に向かって必死に手を伸ばしている。

身体は全身痛々しい程に傷を負いつつも、空に何かを訴えている。

「ーー何なんだ？これ…」

脳裏によぎった光景、見たこともない、なのにあまりにリアルであり、カミュは頭を抱えた。

再び視界が暗転する。

そこは一本の木の下であった。ここが、どこかカミュは知っている。

彼女がよく座って本を読んでいた場所。

「ーー静寂の森？」

そこに立つ、彼女の赤い杖。

それを囲む仲間達。言葉を失っている。

その中には自分がいる。

なのに、肝心の彼女の姿がない。

そこにいる自分はその木の幹を殴りつけている。

何度も、何度も。妹を失った時のように。

「ーーーやめろ…やめろ！！！」

視界が晴れる。白昼夢でも見せられた気分だ。

呼吸が荒く、たった僅かな間であったろうに、全身汗だくであった。

傍にあった水を一気に飲み干すと、眼の前にいたイレブンが、泣きそうな顔をしていることに気が付いた。

「イレブンーーおまえ…」
「今キミが何を見たのかボクには想像つく。でも、今のボクから言えることは何もない。いつか…キミには話そうと思ってる。けど…また後悔したキミに、こんな話、絶対に聞かせれられない」

イレブンは口が固い。恐らく、何らかの力で途方とないことを経験したのであろうが、問い詰めても何があったのか、自分から話す気になるまで決して話はしないだろう。

ただ。

「おまえはーーオレが後悔したこと…知ってるんだな？」
「そうだよ。キミはずっと後悔してた。ずっとベロニカのことが好きだったんだって。けど、気付いた時にはもうどうにもならない。自棄になって、浴びるほどお酒飲んで忘れようとしてたよ。酔い潰れるまで飲んで気絶たように眠って…。戦いの時だってそう。まるで自分を痛めつけるように戦ってた」

走り続けて、忘れようとしていた。けど、忘れられなかった。

「もうボクは…あんな痛々しいキミのこと、二度と見たくないし、二度とあんな結末で終わって欲しくないんだ。だから…」

突然立ち上がったイレブンは、カミュの胸ぐらを思い切り掴んだ。

「本当に好きなら、諦める前にやることがあるだろ？！後悔するくらいならカッコつけて諦める前に、土下座してでも足掻いてでも手に入れてみろよ！！盗賊王カミュ！！元盗賊の癖に自分の気持ちにウソまでついて、大切な物を諦める盗賊がどこにいるんだ！！」

普段からは想像出来ない剣幕と、さすが勇者と思われる凄い力で掴まれたものだから、カミュも全く振り解けない。というか、もはや首を絞められている。

「イレブン…！！分かった！分かったから手を離せ…！！」

このままではベロニカのことを諦めない前に勇者に殺される。

ようやく解放され、咳き込むカミュをまだイレブンは睨んでいる。

「ゲホッ…ったく、とんだ勇者さまだ。これじゃあアイツに気持ちを伝える前に死んじまう」
「キミが全部悪いんだよ！ベロニカを悲しませならこんなんじゃ…」
「あーー分かった。分かったよ、相棒。オレの負けだ。アイツを…ベロニカを諦めることをやめる」

そうだった。

"地の底で出会う勇者を助けろ"

そんな本当なのかどうかも分からない予言を信じて、最後はマヤを助け出すことが出来た。

勇者の力と、そしてなによりも自分がマヤのことを諦めなかったからこそ、贖罪を果たせたのだと思う。

今もまたその勇者が、「ベロニカのことを諦めるな」と若干暴力的ではあるものの、背中を押してくれている。

自分が傍にいることがベロニカにとって本当に良いことなのかは分からない。
たとえ一緒になっても、彼女に辛い思いをさせてしまうかもしれない。

それでも、やっぱり他の誰かと彼女が一緒にになるなんて嫌だった。所詮、自分は聖人でなく、嫉妬深い俗物なのだ。

(オレなりのやり方で、アイツの傍にいる)

決意したカミュの眼を見て、イレブンは安堵したようである。

「もう大丈夫だね、カミュ」
「ああ。まあ、そもそもベロニカがどう思ってるかなんて分からねえけどな。おまえもアイツの気持ちなんて聞いたことねえだろうが」
「え？あるよ」

カミュは思わず、椅子から転げ落ちそうになる。

あっかからんとした顔で平気でぶっ込んでくる勇者はまさに悪魔の子の渾名が相応しい。

自分もそうなのだが、なんとなくの雰囲気で、ベロニカが好きな相手を自分だと思っているものだと考えていた。まさか本人から直接聞いたことあるとは。

「ベロニカから相談受けたことあるからね。カミュのことが好きだって」

そう言っていたベロニカをイレブンは思い出す。

(イレブン。笑わないで聞いてちょうだいね？あたし…えっと、アイツ…カミュのことが好きみたい)

そんな相談受けなくても、みんな知っていた。だからこそ、彼女の気持ちがこの眼の前の男に届いて欲しいと心から思った。

「すごく悩んでたよ？もう少し素直になりたいって。ベロニカから秘密にする様に言われてたけど、キミもベロニカのことが好きだってちゃんと言うなら別に黙っておく必要もないからね。あ、でもボ

クが言ってたとは言わないでね？焼き殺されちゃう」
「…マジか」

ベロニカが、自分のことを好いてくれている。

本当に、あの勝気でまっすぐな瞳が、自分だけを見てくれている。

改めて本当の彼女の気持ちを知って、今更になって、カミュは俯いて額に手を当てた。熱い。
身体中の血の巡りが一気に速くなった気がした。胸が早鐘のように打っている。

これは本当に自分なのだろうかと自問自答したい。恋とか愛だとかなんて、無縁でいたいとか宣っていたのはどこの誰だったのか。

そもそも彼女の気持ちも知らないまま、諦める、なんて言っていた先程までの自分を殴ってやりたい気分だ。

「あ、カミュ。今すごく嬉しいんでしょ？」
「…うるせえぞ。黙ってろ」
「あの時のベロニカ、可愛かったなぁ。カミュにも見せてあげたかったよ」
「うるせえ。うるせえぞイレブン！」

珍しく顔を真っ赤にする相棒を見て、イレブンは吹き出した。相棒にはどちらかと言うと弄れてばかりで、こんなふうに弄ることが出来ることは滅多にない。

舌打ちして、カミュが立ち上がる。

「…オレもアイツのために、今出来ることをする。あの学者野郎にこのまま任せるだけなんて性に合わねえ」

さっきまでさん付けで呼んでいたエースのことを野郎呼ばわりであ

る。やはり盗賊カミュはこうでなければ、とイレブンは苦笑しつつも思う。

「サマディーに行くんだね？」

カミュが別行動を取った理由は既に聞いた。
本当はベロニカから離れる為というのこともあったのかもしれないが、今はもう違う。

「ああ。小さい可能性かもしれねえけど、アイツが少しでも元に戻れるかもしれねえ可能性があるなら、オレも諦めずにそれを追ってみるさ。それが遺跡のことにも繋がれば良いんだけどな…」

何が待ち受けるかは分からない、危険を伴う仕事だ。

それでも、カミュは未来に向けた一歩を新たに踏み出す。

順調だという神殿の発掘を引き続き勇者に頼み、カミュは躊躇うのことなく、見知らぬ世界へと踏み込んでいったーー

続く